（ 続紙 1）

京都大学	博士（教育学）	氏名	奥井　遼
論文題目	わざの臨床教育学 ―淡路人形座における人形遣いの稽古および興行に関する現象学的記述		

（論文内容の要旨）

本論文は、身体を使ったわざの習得場面に立ち会い、そこでの「学び」の過程を記述することによって、「身体による学び」の再構築を試みたものである。

序章では、近年におけるわざ研究の関心の高まりと先行研究が考察され、本論文の課題が定位される。メルロ=ポンティが『知覚の現象学』などで論じたように、人は日常的なコミュニケーション場面において、双方向的で、未だ明確な意図を持たない、それでいて関係構造に大きく寄与する身体的行為のやり取りに身をさらしている。教育の場面においても、教え手と学び手との間にミクロなやり取りが働くのであれば、その背景的な働きこそ身体による学びを根本的に再考するための着眼点である。そうした現象学的な問いかけを引き継ぎ、2009 年度より淡路人形座（兵庫県南あわじ市、人形浄瑠璃の一座）の人形遣いを対象として、通算 68 回に及ぶフィールド調査を実施してわざを遂行する場面の観察を試み、その詳細な調査と分析に基づき、以下の記述と考察を展開する。

第Ⅰ部「稽古―わざと向き合い、応じる身体」では、淡路人形浄瑠璃の稽古に参与している人たちのミクロなやり取りが、人形遣いの身体の働きに着目しながら記述され分析される。

第二章「稽古を支える相互行為」では、人形遣いたちの稽古場面を二つ取り上げ、稽古の円滑な相互行為を支える身体の働きを記述している。そして、人形の振りを実現させるために、彼らの身体は背景化していくが、その働きによって稽古のやり取りが濃密に行なわれていることが明らかにされる。

第三章「知識の参照点としての身体」では、足遣いがわざの習得に苦労する場面を取り上げ、身体の「ままならなさ」に着目し、稽古のプロセスを描き出すことを試みている。ここでは、「身体図式の崩壊」、「アドバイスの交錯」、「知識の出現」など、双方向的かつ偶然的に進められる稽古のありようが記述され考察される。

第四章「身ぶりとしての言葉」では、頭遣いがわざの習得に手間取る場面を取り上げ、身ぶりと言葉がワンセットになった稽古のやり取りを記述する。彼らの言葉の使い方をつぶさに観察するならば、それは身ぶりを伴うきわめて曖昧なものである場合もあれば、動作の獲得を促すような分析的な明瞭さを発揮する場合もある。そのやり取りを丁寧に読み解くことによって、稽古場面全体で生起している重層的な学びのありようを記述し考察している。

以上、第Ⅰ部で試みているのは、身体の背景的な働きに着目して、わざの稽古場面を詳細に

記述し考察することにある。これを通して見出された、身体が背景化したり焦点化したりしながら雄弁に意味をやり取りする現場こそ近代教育学において十分に掬いとられてこなかった教育のダイナミズムの源泉であり、そこに立ち返ることによって「学び」の再構築が展望される。

第Ⅱ部「興行―わざを継承し、実演する身体」では、実際の興行場面を見ることで、人形遣いの習得したわざが、師匠からどのように継承されてきたのか、またどのようなプロセスで実演されていくのかを明らかにする。

第五章「わざの継承と変容」では、中世の終わりから江戸時代、明治から昭和へと続く淡路座の来歴、それに伴う近年の神事の芸能化、組織の再編に伴うわざの変化と亡き師匠との関係を取り上げ、わざを継承するという営みに彩りを与えている文脈を浮き彫りにする。

第六章「『淡路らしさ』を求めて」では、淡路人形座が近年力を入れている「復活公演」に焦点を定め、舞台の成立過程、部分稽古、総稽古までの道のりに着目し、彼らがいかにして「淡路らしさ」と対峙し、また創出しようとしているのかを明らかにしている。それによって、「淡路らしさ」に向かう道のりは、「昔の淡路」という理念を追いかけつつも、「文楽」や「阿波」の芸風との距離や、「人形の大きさ」という物質的な制限、あるいは「舞台の進行」などの臨場的なものに揺り動かされながら実現されていく過程であることを明らかにする。

第七章「『巡業』、あるいは等身大の駆け引き」では、日本各地の小中学校に出向いて人形体験のワークショップを行う「出張公演」の事例を取り上げる。座員たちはかつての淡路座の「巡業」と重ね合わせることで「出張公演」を観客と駆け引きをするプロの芸人として興行している。それは定められた時間の枠組みの中での「授業」を求める学校の秩序を破壊し、創造していく試みである。

以上、第Ⅱ部では、「観光資源」と「伝統の継承」という矛盾する使命を背負いながら形成されてきたわざの等身大の姿を描き出している。これにより、淡路人形座のわざが、試行錯誤のプロセスのなかでミクロな破壊と生成を繰り返すことを浮き彫りにしている。

以上の記述と分析と考察を通して、終章では、総括として、本論文が、身体に関する教育学の関心にいかなる展望を与えるのかを呈示する。表象主義的な学習のあり方を乗り越えるための展望は、それを真っ向から否定して新たな教育理論を打ち立てることではなく、それを留保し、ミクロな身体の働きに関する記述を重ねることで、内側から食い破るという仕方で見いだすことが出来る。こうして、当事者たちの身体的なやり取りを見いだし、そこを起点とすることによって学びの再構築へと向かう道が開かれることを、フィールド調査に基づく記述と考察を通して明らかにし、その教育学的課題を問題提起している。

（続紙　２）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、わざ研究がもたらす教育学的課題に対する野心的かつ独創的な研究であると高く評価できる。

一、その挑戦性　本論文の野心ないし挑戦とは、まず表象主義的な学習観と方法に対する乗り越えと、その批判でもあるレイヴとウェンガーらによる正統的周辺参加論の吟味として設定される。それは、学ぶべき知識をあらかじめ情報化・記号化して個人から個人へと一方向的に伝えるかのように捉える表象主義的学習観においても、学びのあり方を共同体のシステムに還元する正統的周辺参加論的学習観においても見落とされていくわざの身体論的地平を臨床教育学の問題領域のなかに開拓・定位するという野心的・挑戦的試みである。

二、その独創性　本論文の独創性は、臨床教育学の問題領域としては誰も目をつけることのなかった淡路島の人形浄瑠璃を綿密なフィールド調査による観察を行ない、行動分析と会話分析の二つの手法による事例研究のなかから、「わざと向き合い、応じる身体」（第Ⅰ部　稽古）と「わざを継承し、実演する身体」（第Ⅱ部　興行）の相を緻密かつ具体的な事例分析を通して問題点を浮び上がらせ考察した点にある。とりわけ、フィールド研究に基づく第Ⅰ部「稽古」の事例分析は、人形浄瑠璃研究としても、わざ研究としても、従来のどの研究者も踏み込まなかった領域に明確な方法意識をもって乗り込み、メルロ＝ポンティの現象学的身体論研究や人類学や社会学の身体論研究の問題意識と蓄積を踏まえて解明した大変魅力的で豊穣な研究として高く評価できる。

三、明らかにした問題点　本論文の記述と考察を通して明らかになった主要な問題点は、以下の通りである。

第一に、淡路人形浄瑠璃の稽古の円滑な相互行為を支える身体の働きに着目し、稽古の中で飛び交っている身体的な意味の網目を解き明かしたこと。具体的には、初心者の足遣いの稽古場面と上級者である頭遣いと左遣いの稽古場面を分析し、人形の振りを実現させるために彼らの身体が「背景化」し、それによって稽古のやり取りが濃密に行なわれていることを解明した。

第二に、足遣いがわざの習得に苦労する場面を取り上げ、身体の「ままならなさ」に着目し、稽古のプロセスをリアルに記述することに成功したこと。これによって、身体図式の崩壊、アドバイスの交錯、知識の出現など、双方向的かつ偶然的に進められる稽古のありようが記述され、「知識の参照点としての身体」の相を浮かび上がらせた。

第三に、わざの習得過程での身ぶりと言葉がワンセットになった稽古のやり取りを記述することにより、そこでの言葉が身ぶりを伴う曖昧なものであり、動作の獲得を促す

分析的な明瞭さを発揮するものでもある両義性を浮き彫りにして重層的な学びのありようを描き出し、「身ぶりとしての言葉」の位相を明らかにした。

第四に、淡路人形芝居の来歴と近年の取り組みについて考察することによって、わざを継承するという営みに彩りを与えている文脈を明らかにしたこと。淡路座の来歴の検討を通して近年の神事の芸能化と組織の再編に伴うわざの変化と亡き師匠との関係を明らかにし、彼らが身を投じているわざは、生き残りと伝統の継承という二つの異なる要請に応じるという文脈を背負いながら形成されてきたことを明確に位置づけた。

第五に、「復活公演」における舞台の成立過程、部分稽古、総稽古までの道のり全体をフィールド調査することで、「淡路らしさ」を追求したわざが現れる過程を明らかにし、「淡路らしさ」に向かう道のりが「昔の淡路」という理念を追いかけつつも、「文楽」や「阿波」人形浄瑠璃の芸風との距離や、「人形の大きさ」という物質的な制限と「舞台の進行」という臨場的な要請に揺り動かされながら実現していく「わざの継承と変容」の過程を明確にした。

第六に、各地の小中学校に出向いて人形体験のワークショップを行う「出張公演」の過程を具に調査し、学校教育からの期待に対して座員たちがいかなるわざで応答するのかを検討し、そこに、定められた時間の枠組みの中での「授業」を求める学校の秩序を破壊しまた創造していく「等身大の駆け引き」の試みがあることを明らかにした。

四、本論文の課題　以上の分析と考察を通して、本論文は身体に関する教育学の関心にいかなる展望が開かれるのかを呈示したが、口頭試問では、表象主義と近代教育学に対する捉え方に不十分さがあること、魅力的で豊穣な問題提起を孕む各論の横に繋ぐ操作概念の設定が足りないこと、演技者と興行者に対する鋭く深い考察はあっても観客の問題に充分に触れられていないこと、淡路人形浄瑠璃という特殊事例の分析から打ち出される普遍的問題への接続の不徹底などが指摘された。が、これらの指摘は、本論文の独創的な新知見の価値をいささかも損なうものではなく、今後のさらなる発展に向けた課題と期待である。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 26 年 2 月 10 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　　年　　月　　日以降